

家ノ上遺跡

— 県営庄内第5地区通作条件整備事業に伴う遺跡発掘調査報告 —

2020年3月

青森県教育委員会

家ノ上遺跡

— 県営庄内第5地区通作条件整備事業に伴う遺跡発掘調査報告 —

2020年3月

青森県教育委員会

序

青森県埋蔵文化財調査センターでは、平成30年度に県営庄内第5地区通作条件整備事業予定地内に所在する家ノ上遺跡の発掘調査を実施しました。

調査の結果、縄文時代の土坑が検出され、当時の人々の生活の痕跡を知ることができました。

この調査成果が今後、埋蔵文化財の保護のために広く活用され、また、地域の歴史を理解する一助となることを期待します。

最後に、日頃から埋蔵文化財の保護に対してご理解をいただいている青森県農林水産部農村整備課に厚くお礼申し上げますとともに、発掘調査の実施と調査報告書の作成にあたり、ご指導、ご協力をいただきました関係各位に対し、心より感謝いたします。

令和2年3月

青森県埋蔵文化財調査センター

所 長 鈴 木 学

例 言

- 1 本書は青森県農林水産部農村整備課による県営庄内第5地区通作条件整備事業に伴い、青森県埋蔵文化財調査センターが平成30年度に発掘調査を実施した六ヶ所村家ノ上遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査面積は1,600m²である。
- 2 家ノ上遺跡の所在地は青森県上北郡六ヶ所村大字倉内字家ノ上地内、青森県遺跡番号は411149である。
- 3 発掘調査及び整理作業・報告書作成の経費は、調査を委託した青森県農林水産部農村整備課が負担した。
- 4 本書に関する発掘調査から整理・報告書作成までの期間は、以下のとおりである。

発掘調査期間	平成30年6月26日から同年8月31日まで
整理・報告書作成期間	平成31年4月1日から令和2年3月31日まで
- 5 本書は青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。執筆及び編集は青森県埋蔵文化財調査センター齋藤岳総括主幹、齋藤正文化財保護主幹、木村恵理文化財保護主事が行った。依頼原稿の執筆者名は文頭に記した。発掘調査成果の一部は、発掘調査報告会等において公表しているが、これらと本書の内容が異なる場合においては本書が優先する。
- 6 本書に掲載した地形図（図1 家ノ上遺跡と周辺の遺跡）は、国土地理院発行の2万5千分の1『内沼』・『甲地』を複写・加工して使用した。
- 7 測量原点の座標値は、世界測地系(JGD2011)に基づく平面直角座標第X系による。挿図中の方位は、すべて世界測地系の座標北を示している。
- 8 遺構には、その種類を示すアルファベットの略号に検出順位を示す算用数字を組み合わせた略称を付した。略号は以下のとおりである。

土坑-SK
- 9 遺跡の基本層序にはローマ数字、遺構内堆積土層には算用数字を使用した。各土層の色調表記等には、『新版標準土色帖 2006年版』（小山正忠・竹原秀雄）を基に記録した。
- 10 各挿図中の遺構実測図の縮尺は、土坑は1/40とし、スケールを示した。遺構配置図等は適宜縮尺を変更し、各挿図にスケールを示した。
- 11 遺構実測図の土層断面図等には、水準点を基にした海拔標高を付している。
- 12 発掘調査及び整理・報告書作成における実測図、写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターが保管している。
- 13 発掘調査及び整理・報告書作成に際して、六ヶ所村教育委員会からご協力を得た。

目 次

序

例言

目次

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯…………… 1

第2節 作業の方法…………… 1

1 発掘作業の方法…………… 1

2 整理・報告書作成作業の方法…………… 1

第3節 調査及び整理体制…………… 2

1 発掘調査体制…………… 2

2 整理・報告書作成体制…………… 2

第4節 作業の経過…………… 3

1 発掘作業の経過…………… 3

2 整理・報告書作成作業の経過…………… 3

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡…………… 4

第2節 遺跡周辺の地形及び地質…………… 6

第3章 検出遺構……………10

第4章 総括……………12

引用・参考文献……………13

写真図版……………14

報告書抄録

図版目次

図1 家ノ上遺跡と周辺の遺跡…………… 5

図2 遺跡周辺の地形分類図…………… 6

図3 基本層序…………… 7

図4 遺構配置図…………… 9

図5 第1号土坑(SK01)・第2号土坑(SK02)……………11

写真目次

写真1 遺跡遠景・調査前風景……………14

写真2 第1号土坑(SK01)……………15

写真3 第2号土坑(SK02)……………16

写真4 基本層序・作業風景・
精査終了状況(1)……………17

写真5 精査終了状況(2)……………18

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

県営庄内第5地区通作条件整備事業に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱については、青森県教育庁文化財保護課（以下「文化財保護課」）と青森県農林水産部農村整備課及び上北地域県民局地域農林水産部（以下「事業者」）が平成27年度から協議・踏査を行っていた。

調査状況が整ったことから文化財保護課が平成28年7月12～15日及び同年11月15日に試掘調査を実施した。その結果、遺構が検出されたことから周知の埋蔵文化財包蔵地の新規登録を行い、家ノ上遺跡として登録した（青森県教育委員会2017）。この試掘調査の結果を受けた後の文化財保護課と事業者との協議で、家ノ上遺跡の本発掘調査は平成30年度に埋蔵文化財調査センターが行うこととなった。

なお、家ノ上遺跡に係る土木工事等のための発掘調査に関する通知書は、平成30年6月22日に上北地域県民局長名で提出され、現状保存が困難であることから、同年6月22日に青森県教育委員会教育長名で当該工事着手前における埋蔵文化財の記録の作成を目的とする発掘調査の実施が指示された。

（笹森 一朗）

第2節 作業の方法

1 発掘作業の方法

[測量基準点・水準点の設置とグリッドの設定] 測量基準点と水準点については、世界測地系に基づく既知点を利用し、調査区に任意杭を設置して使用した。グリッド法を採用し、世界測地系による公共座標値（ $X = 94500.000$ 、 $Y = 37500.000$ ）を基準点（I A-0）としグリッドを設定した。

[基本層序] 基本層序は2か所で設定した。農道拡幅部のため現農道による掘削の影響を受けておらず第2号土坑に近い地点で基本層序1、農道内で遺跡内の一部のみ確認できる間層を含む部分を基本層序2として設定した。層名は上位からローマ数字を付して呼称した。

[表土等の掘削] 表土等の掘削作業・排土移動は、重機を使用して省力化を図った。農道拡幅部分の畑地では、人力で行った。

[遺構の調査] 検出遺構は、原則として確認順に種別毎の略号と算用数字を組み合わせた遺構番号を付して精査した。堆積土観察用のセクションベルトは、2分割で設定した。遺構の平面図、堆積土層断面図、遺構配置図、地形測量図等の作成は株式会社CUBIC製の「遺構実測支援システム」及びトータルステーションを用いた。

[写真撮影] 写真撮影は、35mmモノクローム、35mmリバーサル、1,800万画素のデジタルカメラを用い、発掘作業状況、土層の堆積状態、遺構の精査状況、完掘後の全景について記録した。

2 整理・報告書作成作業の方法

[図面類の整理] 図面整理では、株式会社CUBIC製の「遺構実測支援システム」で作成された遺構の平面図と堆積土層断面図等の調整を行った。また、図面の測量点等についてはエクセルファイル(xlsx形式及びcsv形式)でHDDに収納した。

[トレース・版下作成] 遺構実測図のトレースは、株式会社CUBIC製「トレースくん」、Adobe社製「Illustrator Creative Cloud」を用いてデジタルトレースを行った。実測図版及び写真図版の版下等は、主にAdobe社製「Illustrator Creative Cloud」を用いて作成した。

[遺構の検討・分類・整理] 遺構毎に種類・構造的特徴等に関するデータを整理し、構築時期や同時性・性格等について検討を加えた。

[調査成果の検討] 遺構の検討結果を踏まえて、遺跡の特徴等について総括した。

第3節 調査及び整理体制

1 発掘調査体制

平成30年度は、平成28年度に行われた文化財保護課の試掘調査の結果で示された開発用地杭NO.46～59間の発掘調査を行うこととした。縄文時代が主体の遺跡と考えられ、遺構・遺物の検出と層位的な調査に主眼をおいて発掘調査を進めることとした。

発掘調査体制は、以下のとおりである。

[平成30年度]

調査主体 青森県埋蔵文化財調査センター

所長	安田 正司（平成31年3月定年退職）
次長（総務GM）	黒滝 雅信（平成31年3月定年退職、現青森県教育庁学校施設課主幹専門員）
調査第二GM	笹森 一朗
総括主幹	齋藤 岳（発掘調査担当者）
文化財保護主幹	齋藤 正（発掘調査担当者）
文化財保護主事	木村 恵理（発掘調査担当者）

専門的事項に関する指導・助言

調査員 関根 達人	国立大学法人弘前大学人文社会科学部教授（考古学）
〃 上條 信彦	国立大学法人弘前大学人文社会科学部准教授（考古学）
〃 山口 義伸	日本第四期学会会員（地質学）

2 整理・報告書作成体制

整理・報告書作成作業は、発掘調査に携わった職員で構成する。

整理主体 青森県埋蔵文化財調査センター

所長	鈴木 学
次長（総務GM）	川村 和夫
調査第二GM	笹森 一朗
総括主幹	齋藤 岳（報告書作成担当者）
文化財保護主幹	齋藤 正（報告書作成担当者）
文化財保護主事	木村 恵理（報告書作成担当者）

第4節 作業の経過

1 発掘作業の経過

平成28年度に行われた文化財保護課の試掘調査の結果で、本調査が必要とされた開発用地杭N0.46～59間の調査を行うこととした。また、遺構・遺物の検出等、層位的な調査に主眼をおいて発掘調査を進めることとした。調査対象となるのは現農道とその拡幅部分の牧草地及び畑地であり、調査区の総延長距離は約260mで幅は6mである。調査にあたっては、現農道北側に幅7mの土の仮置場及び通路部分を借地し、その北端に鉄板敷設による仮設迂回路を設置して農道下を調査した。現農道部分には、碎石等が厚く積み重なっている。調査区は東西に長く排土置場が狭い。そのため、調査区の東側と西側に最初の調査区を設定し、重機による排土を隣接する農道上に仮置きし、重機で調査終了後に埋め戻して転圧してから隣接地点を調査するという方法をとった。

発掘作業の経過は以下のとおりである。

[平成30年度]

- 6月26日 発掘器材を搬入し、調査を開始した。重機による表土の除去を開始した。
- 7月上旬 遺構確認を行った。
- 7月中旬～ 農道拡幅部分の畑地にトレンチAからNまで順次設定し、遺構確認を開始した。
遺構確認及び検出遺構の精査を開始した。
- 8月上旬～ 表土除去及び遺構確認を行った。
- 8月中旬～ 表土除去、遺構確認及び遺構精査を継続した。
- 8月31日 すべての作業を終了し、調査器材等を搬出した後、現地から撤収した。

2 整理・報告書作成作業の経過

報告書刊行事業は平成31・令和元年度に実施することとなり、整理・報告書作成作業は平成31年4月1日から令和2年3月31日までの期間で行った。遺構のみの検出で、遺物は出土していないことから、これに応じた整理作業の工程を計画した。

整理・報告書作成作業の経過は以下のとおりである。

[平成31・令和元年度]

- 4～5月 写真整理及び図面修正を行った。
- 6～8月 図面のトレース作業を行った。原稿執筆作業及び図版作成を行った。
- 9～11月 版下・原稿が揃ったので、編集作業を行った。
- 12月 印刷業者を選定し、契約締結後に原稿等を入稿した。
- 1～3月 3回の校正を経て3月11日に報告書を刊行した。また、3月末には記録類を整理して収納した。

(齋藤 岳)

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡

家ノ上遺跡は、下北半島中部の太平洋に面した六ヶ所村に位置する。六ヶ所村では1970年代から、むつ小川原開発事業等により主に鷹架沼及び尾駮沼周辺で、多数の発掘調査が行われてきた。家ノ上遺跡は六ヶ所村南部の倉内地区に位置し、六ヶ所村内では比較的発掘調査事例が少ない地域である。遺跡の所在する六ヶ所村南部と隣接する東北町北東部の周辺遺跡を、水系をもとに東5km、西2.5km、南4.5km、北2.8kmの範囲で区切り、図1と表1にまとめた。

本遺跡から約4km東に小川原湖北端の内沼があり、その周辺には遺跡がまとまって分布する。湖畔には六ヶ所村唐貝地貝塚、中志(1)貝塚、中志(2)貝塚などの貝塚が分布する。これらを含めた青森県内の貝塚については、知見が積み重ねられている(福田2012、青森県教育委員会2019)。

他に遺跡がまとまりを示すのは、東北町北東部を南北に貫く土場川周辺の地域である。この地域では、送電用鉄塔建設に伴う発掘調査が行われているが、家ノ上遺跡周辺での発掘調査例はない(東北町教育委員会1999)。

小川原湖畔で発掘調査が行われた周辺遺跡としては、六ヶ所村唐貝地貝塚、唐貝地遺跡、東北町沼添左ノ平(1)遺跡、野田頭山(5)遺跡があげられる。また、六ヶ所村金堀沢遺跡は2014年から東海大学による平安時代の竪穴建物跡の発掘調査が継続している(松本2019)。

唐貝地貝塚は縄文時代早期後葉の赤御堂式期の鹹水性のハマグリを主体とする貝塚である(二本柳正一他1959)。唐貝地遺跡は縄文時代中期後葉から末葉の竪穴建物跡2棟、土坑3基を調査し、2基のフラスコ状土坑のうち1基に貝の廃棄があった。アサリ主体で、一部アカニシであった。また、平安時代の竪穴建物跡3棟、土坑1基も調査されている(青森県教育委員会1992)。

沼添左ノ平(1)遺跡では、縄文時代早期末から前期初頭の竪穴建物跡1棟と土坑1基、中期末から後期初頭の竪穴建物跡が1棟と土坑12基、詳細時期不明の土坑1基が調査されている。土坑は全てフラスコ状であることが注目される。他に溝状土坑1基が調査されている(東北町教育委員会1995・1996)。

野田頭山(5)遺跡では、縄文時代中期後葉から末葉の竪穴建物跡4棟、2基のフラスコ状土坑を含む土坑10基、溝状土坑1基が調査されている。うち、2棟の竪穴建物跡内と2基の土坑からアサリ・ホタテガイ等が出土している(東北町教育委員会2004)。なお、周辺の野田頭山(1)遺跡では、表面採集やボーリング調査で貝層が確認されている(東北町教育委員会1995・1996)。

また、図の枠外になるが家ノ上遺跡の北には田面木沼に注ぐ平沼川水系の遺跡がある。4km北には、縄文時代早期中葉や弥生時代後期などの遺物が出土した千歳(13)遺跡が発掘調査されている(青森県教育委員会1976)。5.3km北には時期不明の小土坑1基が検出されたものの遺物が出土しなかった陸栄(4)遺跡、縄文時代前期前葉から後期にかけての配石遺構が1基検出された陸栄(6)遺跡で発掘調査が行われている(六ヶ所村教育委員会1993)。

家ノ上遺跡周辺の遺跡をまとめると、①大きな集落の調査例が無いこと②フラスコ状土坑の検出が多く、うち数基から貝の出土があること③時期は縄文時代中期後葉から後期の遺跡が多いことが指摘できる。(齋藤 岳)

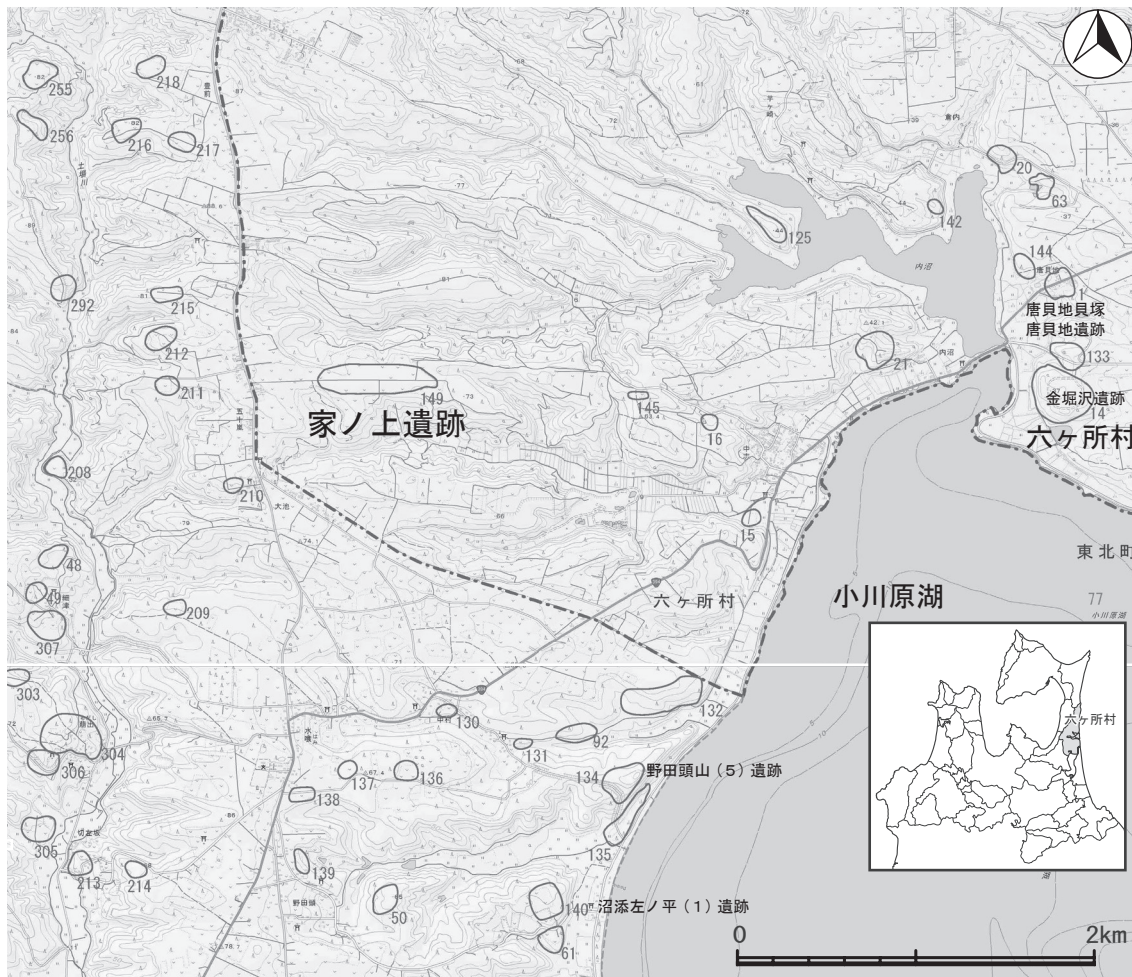


図1 家ノ上遺跡と周辺の遺跡

六ヶ所村			東北町					
遺跡番号	遺跡名	時代	遺跡番号	遺跡名	時代	遺跡番号	遺跡名	時代
411001	唐貝地貝塚	縄文(早・前・中・後・晩)、平安	408048	細津(1)遺跡	平安	408211	細津橋ノ上(4)遺跡	縄文(後)
411012	湯の沢遺跡	縄文、奈良、平安	408049	細津(2)遺跡	平安	408212	細津橋ノ上(5)遺跡	縄文
411014	金堀沢遺跡	縄文(中・後)、奈良、平安	408050	野田頭(1)遺跡	縄文早・前・中・後・晩)、平安	408213	切左坂(1)遺跡	平安
411015	中志(1)貝塚	縄文(前・中)	408061	野田頭山(1)遺跡	縄文(前・後)、平安	408214	切左坂(2)遺跡	平安
411016	中志(2)貝塚	縄文	408130	中村道ノ下(1)遺跡	縄文(前)、平安	408215	五十嵐(1)遺跡	縄文(早)
411020	湯の沢(1)遺跡	縄文(早・前・後)	408131	中村道ノ下(2)遺跡	平安	408216	五十嵐(2)遺跡	縄文(中・後)
411021	中志館遺跡	奈良、平安	408132	野田頭山(3)遺跡	縄文(前)	408217	五十嵐(3)遺跡	縄文(中・後)
411022	六原(1)遺跡	縄文(中・後)	408134	野田頭山(5)遺跡	縄文(中・後)	408218	五十嵐(4)遺跡	縄文(中・後)
411044	戸鎖(2)遺跡	縄文(前・中・後)	408135	熊堂遺跡	縄文、弥生、平安	408255	淋代下山(1)遺跡	縄文(中・後)
411063	湯の沢(2)遺跡	縄文(中・後)	408136	中村道ノ下(3)遺跡	縄文(中・後)	408256	淋代下山(2)遺跡	縄文(早)
411125	内沼蝦夷館	奈良、平安、中世	408137	中村道ノ下(4)遺跡	平安	408292	淋代下山(3)遺跡	弥生
411133	唐貝地遺跡	縄文(中)、平安	408138	野田頭(2)遺跡	縄文(中・後)	408303	萌出(1)遺跡	奈良、平安
411142	芋ヶ崎(2)遺跡	縄文	408139	野田尻遺跡	平安	408304	萌出(2)遺跡	奈良、平安
411143	唐貝地(2)遺跡	平安	408140	沼添左ノ平(1)遺跡	縄文(後)、平安	408305	萌出(3)遺跡	縄文(早)、奈良、平安
411144	唐貝地(3)遺跡	縄文(前)	408208	細津橋ノ上(1)遺跡	平安	408306	萌出(4)遺跡	弥生、奈良、平安
411145	倉内道ノ上遺跡	縄文(前)	408209	細津橋ノ上(2)遺跡	縄文(後)	408307	細津(3)遺跡	奈良、平安
411149	家ノ上遺跡	縄文	408210	細津橋ノ上(3)遺跡	縄文(後)			

表1 家ノ上遺跡と周辺の遺跡

第2節 遺跡周辺の地形及び地質

調査員 山口 義伸

本遺跡は上北郡六ヶ所村倉内字家ノ上地内にあつて、小川原湖北端の内沼から西方約4km地点に位置する。

下北半島頸部の中央部には吹越山地が位置し、その南方には海岸段丘が広く分布する。高位の天狗岱段丘（標高50～90m）は開析が進んだ波状地で南北に帯状に分布し、標高90m付近では太平洋と陸奥湾との分水界を形成する。中位の高館段丘（標高20～45m）は湖沼群や谷底平野によって大きく分断され、東西に帯状に分布する（東北地方第四紀研究グループ1969；青森県2001）。なお、天狗岱段丘は標高70m以上が海洋酸素同位体ステージMIS9に、70m以下はMIS7に、そして高館段丘はMIS5eに相当すると考えられる（六ヶ所村教育委員会2006）。

本遺跡周辺にみられる主な地層として、第三紀中新世の鷹架層と鮮新世の甲地層、第四紀更新世の野辺地層がある。鷹架層は主に硬質な青灰色の砂岩・シルト岩、甲地層は軽石質凝灰岩を挟む黄橙色砂岩・シルト岩、そして野辺地層はシルト岩や凝灰岩を挟む軟質な砂岩からなる。これらの地層はいずれも段丘砂礫層に広く覆われて露出状況が良くない（青森県2001）。このうち、天狗岱段丘は段丘砂礫層と暗茶褐色の粘土質ローム層から構成され、数枚の粘土質軽石層とクラックの発達した暗色帯が伴う。

本遺跡は標高75～78mの天狗岱段丘上に立地する（図2）。遺跡の南北両端では小川原湖や内沼に注ぐ小谷が東流し、分水界西方では小川原湖に注ぐ土場川が南流する。このことから、遺跡の立地する台地は南北幅が約500mで、東方へ2kmも張り出した緩傾斜面であつて、さらに枝谷の頭部に展開する馬蹄状の緩やかな凹地もあつてやや起伏に富んでいる。

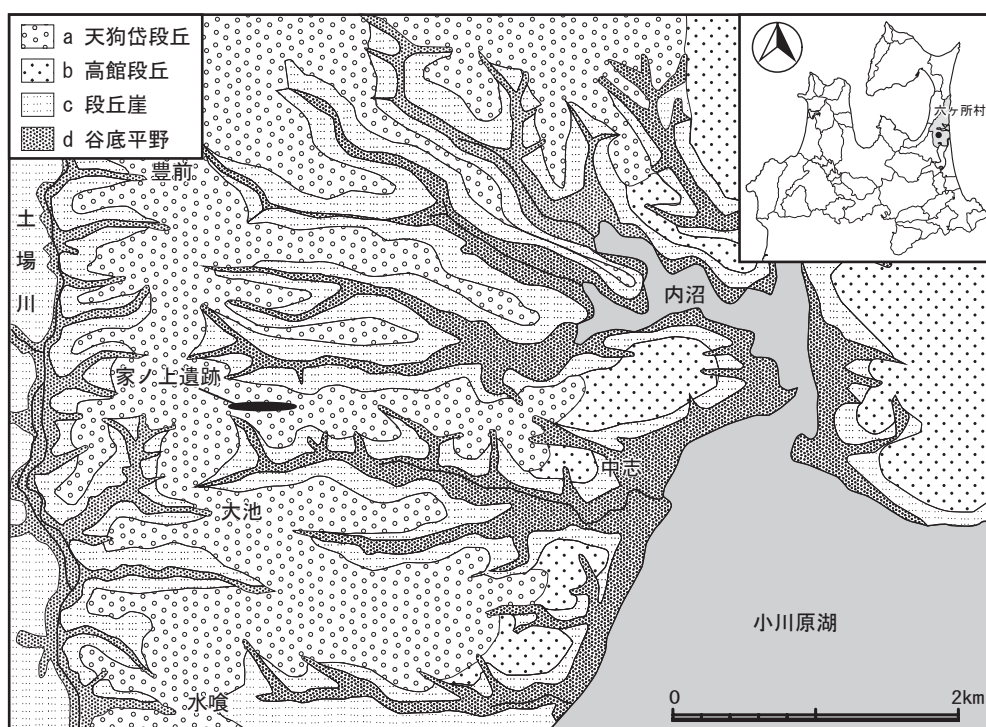


図2 遺跡周辺の地形分類図

調査区内の基本層序は図3に示した。調査区内は牧草地を通る農道部分及び拡幅部分であって、農道部分は表層部分が大きく削平され、整地用の砕石が敷き詰められている。人為的な削平と千曳軽石層の判然としない堆積状況から、遺構の検出にあたっては概ね基本層序のⅢ層からⅣ層上面において実施した。なお、北方に立地する千歳(13)遺跡(青森県教育委員会 1976)では表土直下には黒色腐植質土層、漸移層、千曳軽石層の順に堆積し、千曳軽石層が遺構確認の指標として取り扱っている。

第Ⅰ層；黒色土(10YR2/1)表土・耕作土。上位のⅠa層は整地用に盛り土された部分で、農道拡幅部分の牧草地内では未分解の草根が密集し、農道部分では砕石が敷き詰められている。耕作土であるⅠb層は粘性・湿性にやや乏しい黒色土であり、農道部分では固さがあり乾くとブロック状に割れる。なお、Ⅰb直下には削平された黒色土(間層)がシート状に張り付いたり下位層がブロック状(径3～10cm大)に混入したりと人為的な堆積状況を示す。

間層；黒色土(10YR1.7/1)粘性・湿性のある、ソフトな腐植質土である。削平あるいは人為的な移動により欠如するが多く、土坑などの凹地に局部的にその痕跡が認められる。

第Ⅱ層；灰黄褐色土(10YR4/2)粘性・湿性があり、やや固く締まる。ローム粒や軽石粒の混入が目立ち、全体的に暗い色調である。本層とⅢ層は漸移層であって、色調とローム等の混入状況により細分される。

第Ⅲ層；にぶい黄褐色土(10YR5/3)粘性・湿性があり、やや固く締まる。下位層のローム塊や軽石塊を多量に包含する。包含される軽石塊(径10～数10cm大)は軽石質火山灰層(10YR5/6)であって、千曳軽石層と考えられ(東北地方第四紀研究グループ 1969)、ブロック状の堆積状況は地表水による移動・再堆積相を示唆する。なお、千歳(13)遺跡(青森県教育委員会 1976)では千曳軽石層は本遺跡のⅣ層相当層の直上に20～30cmの厚さで堆積し、軽石層直下にはクラック帯としての緻密堅固な淡赤灰色ローム層が伴うことが多い。

第Ⅳ層；黄褐色土(10YR5/6)粘性・湿性があり、固く締まるロームであって、乾くとブロック状の割れが目立つ。

第Ⅴ層；にぶい褐色土(7.5YR5/4)粘性・湿性があり、固く締まるロームである。Ⅳ層よりも全体的に粘土質である。

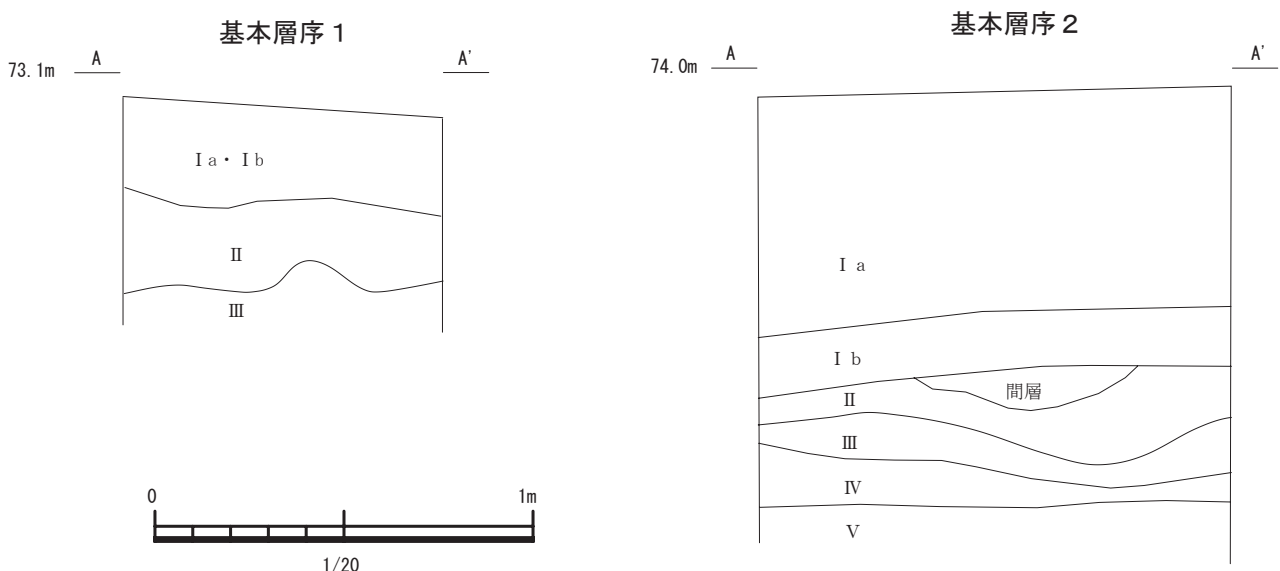


図3 基本層序

引用・参考文献

青森県 2001 『青森県史 自然編 地学』

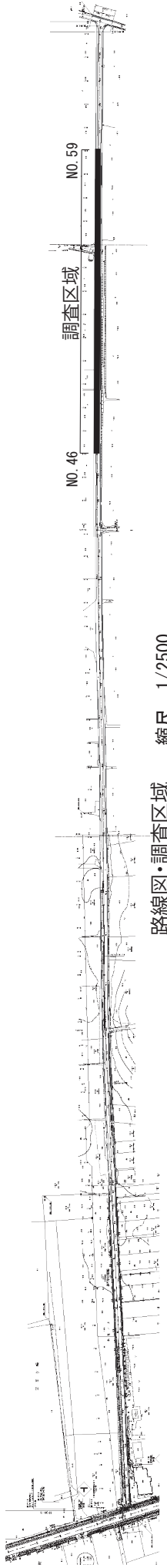
青森県教育委員会 1976 『千歳遺跡(13)』 青森県埋蔵文化財調査報告書第 27 集

青森県教育委員会 2008 『弥栄平(1)遺跡Ⅱ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第 446 集

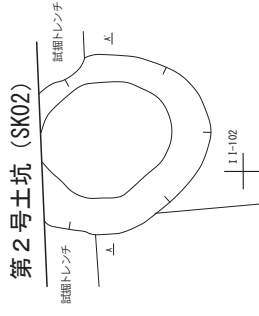
東北地方第四紀研究グループ 1969 「東北地方における第四紀海水準変化 日本の第四系」『地学団体研究会専報 15』

箕浦幸治・小菅正裕・柴正敏・根本直樹・山口義伸 1998 『青森県の地質』 青森県

六ヶ所村教育委員会 2006 『家の後(3)遺跡・家の後(4)遺跡・家の後(5)遺跡・家の後(6)遺跡・千樽(2)遺跡』 六ヶ所村埋蔵文化財調査報告書第 8 集

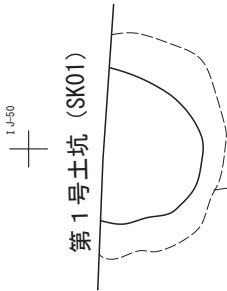


路線図・調査区域 縮尺 1/2500



第2号土坑 (SK02)

1-1-50



第1号土坑 (SK01)

IK X=94540 NO. 46	7.4m	SK01	トレンチ	N	M	L	K	J	基本層序 2	7.3m	I	H	G	F	E	D	C	B	A	7.3m	基本層序 1	SK02	7.2m	NO. 59	45 Y=37680	50 Y=37700	55 Y=37720	60 Y=37740	65 Y=37760	70 Y=37780	75 Y=37800	80 Y=37820	85 Y=37840	90 Y=37860	95 Y=37880	100 Y=37900	105 Y=37920
																									IF X=94520												



1/1000

図4 遺構配置図

第3章 検出遺構

土坑

第1号土坑 (SK01)

【位置・確認】 I I-49・50 グリッドに位置する。文化財保護課による試掘トレンチ6で検出された土坑であり、第Ⅲ層で確認した。北側は調査区外へ延びる。

【重複】 なし。

【平面形・規模】 不整形円で、開口部の直径は約1.7 m、底径は約2.4 mである。確認面からの深さは約1.5 mである。

【断面形】 フラスコ状である。

【堆積土】 9層に分層した。自然堆積である。5層と7層は壁面からの崩落土とみられる。

【出土遺物】 なし。

【小結】 フラスコ状土坑であり、類例から縄文時代と考えられる。

(齋藤 正)

第2号土坑 (SK02)

【位置・確認】 I I-101・102 グリッドに位置する。文化財保護課による試掘トレンチ7で検出された土坑であり、第Ⅲ層で確認した。北側は調査区外に延びる。

【重複】 なし。

【平面形・規模】 楕円形で、推定長軸2 m、短軸1.7 m、確認面からの深さは62 cmである。

【断面形】 逆台形である。

【堆積土】 11層に分層した。自然堆積である。7～9層は地山の崩落土とみられる。

【出土遺物】 なし。

【小結】 確認層位や堆積土などから、縄文時代と考えられる。

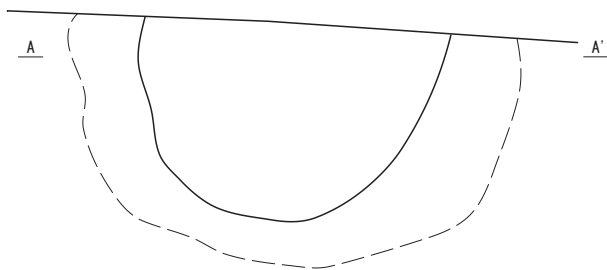
(木村 恵理)



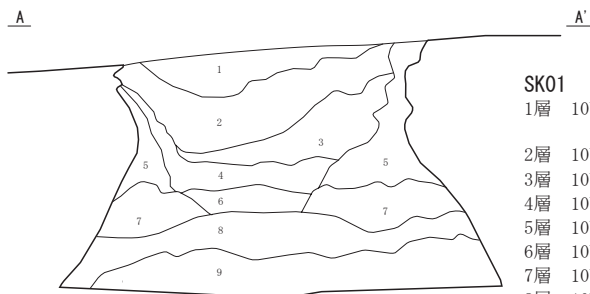
I J-50



第1号土坑 (SK01)



74.1m A



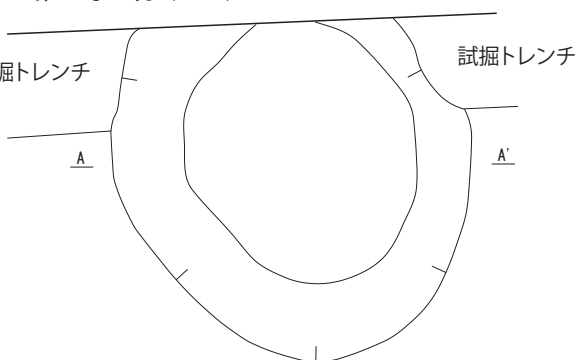
SK01

1層	10YR2/1	黒色土	10YR3/3	暗褐色土5%、10YR5/6 黄褐色土(φ~1cm)5%、炭化物(φ~5mm)1%。
2層	10YR4/2	灰黄褐色土	10YR4/4	褐色土10%。
3層	10YR2/3	黒褐色土	10YR5/6	黄褐色土(φ~1cm)3%。
4層	10YR3/3	暗褐色土	10YR4/6	褐色土(φ~1cm)5%、炭化物(φ~5mm)1%。
5層	10YR5/3	にぶい黄褐色土	10YR3/2	黒褐色土5%、壁面崩落土。
6層	10YR4/3	にぶい黄褐色土	10YR5/6	黄褐色土(φ~1cm)3%、開口部・壁面崩落土か。
7層	10YR5/6	黄褐色土	10YR3/2	黒褐色土5%、壁面崩落土。
8層	10YR3/1	黒褐色土	10YR5/6	黄褐色土(φ~2cm)10%、炭化物(φ~5mm)5%。
9層	10YR3/2	黒褐色土	10YR5/6	黄褐色土(φ~2cm)10%、炭化物(φ~5mm)3%。



第2号土坑 (SK02)

試掘トレンチ

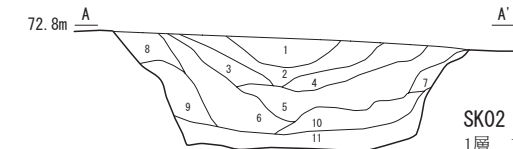


試掘トレンチ

I I-102



72.8m A



SK02

1層	10YR3/1	黒褐色土	黄褐色土(φ0.1~0.2cm)3%。
2層	10YR3/1	黒褐色土	黄褐色土(φ0.1~0.2cm)15%。
3層	10YR2/2	黒褐色土	10YR4/6 褐色土ブロック30%。
4層	10YR2/2	黒褐色土	黄褐色土(φ0.1~0.2cm)3%。
5層	10YR3/3	黒褐色土	黄褐色土(φ0.2~0.5cm)5%、10YR4/6 褐色土ブロック15%。
6層	10YR3/3	暗褐色土	10YR4/6 褐色土ブロック30%、10YR2/2 黒褐色土ブロック20%。
7層	10YR4/4	褐色土	壁面崩落土。
8層	10YR3/4	褐色土	10YR2/2 黒褐色土ブロック5%、壁面崩落土。
9層	10YR4/4	褐色土	10YR3/3 暗褐色土ブロック30%、壁面崩落土。
10層	10YR4/3	にぶい黄褐色土	10YR2/2 黒褐色土ブロック30%。
11層	10YR4/4	褐色土	



1/40

図5 第1号土坑(SK01)・第2号土坑(SK02)

第4章 総括

家ノ上遺跡は、太平洋から約13km内陸に入った標高約75mの段丘上に立地する。南東に約3kmで小川原湖、4km東は小川原湖と内沼の境界付近となる。段丘の尾根筋にあたるため、段丘を開析する南北の谷の中心部までは、いずれも約300mの距離がある。

家ノ上遺跡から検出された遺構は土坑2基である。両者の距離は約210m離れており、形状も異なる。ともに縄文時代に帰属するとしても、詳細な時期は異なると考えておきたい。

第1号土坑は、開口部が狭く底部が広いフラスコ状土坑である。フラスコ状土坑は開口部が狭いので内部の温度と湿度が安定し、開口部を葉や小枝、土などで覆い外気に触れないように貯蔵物を保存していたことが推定されている。そのため貯蔵穴の代表とされている。青森県内では縄文時代早期中葉からみられ、前期中葉以降の円筒土器文化期に増加・大型化するとされる(杉野森2017)。そして詳細な時期においては前期後葉と中期中葉に集中し、本州太平洋側では底径2mを超えるものが中心で、中期後葉以降は小型のものが主体になるとされる(業天2018)。

第1号土坑は開口部の直径が約1.7m、検出面からの深さが約1.5mで底径は約2.4mである。断面図での底面と側面の角度は東側が約60°、西側が約50°である。第2章第1節で紹介した周辺の遺跡では東北町沼添左ノ平(1)遺跡で、13基のフラスコ状土坑が調査されている。底径等の規模が家ノ上遺跡第1号土坑に類似するものがあるが、断面図下部で底面にむかう側面の角度が70°～80°前後で鈍角のものが多く異なる点で異なっている。

家ノ上遺跡から約15km北には縄文時代中期の拠点集落である富ノ沢(2)遺跡が位置している。底面と側面の角度が50°～60°前後で、底径等が家ノ上遺跡第1号土坑に類似した規模を持つフラスコ状土坑が調査されている。詳細時期がわかる例では、中期前葉の円筒上層c式期(第428号土坑)、中期後葉の榎林式期(第457号土坑)、中期中葉の円筒上層e式期(第766号土坑)があげられる。家ノ上遺跡第1号土坑の詳細時期は不明であるものの、富ノ沢(2)遺跡で縄文時代中期に規模や形状が類似したフラスコ状土坑がみられることに注意しておきたい。

第2号土坑は、縄文時代の土坑の基本的な平面形状の一つである楕円形であるため、時期の特定が難しい。また、底面に溝を持つ例や、群をなす場合を除くと、楕円形の土坑の用途の特定は難しい。機能としては、落とし穴や貯蔵穴などが候補となる。落とし穴については土坑の深さが浅いため、可能性は低いといえる。

家ノ上遺跡からは、土坑2基が検出されたが、遺物は遺構外からも出土しなかった。遺物が出土しなかった要因については、畑地造成などに伴う削平などの土地改変による可能性は低いと考えられる。基本層序の部分で記されているように、耕作による攪拌で黒色土は間層として部分的に残存する。しかし、客土や広範囲な土の移動の痕跡はみられなかった。また、表土から人力で手掘りしたトレンチAからNでも遺物は出土していない。水場までの距離があるため、定住集落の立地条件として適していなかったことに起因する可能性がある。

(齋藤 岳)

引用・参考文献

- 青森県教育委員会 1976 『千歳遺跡(13)発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財報告書第27集
 青森県教育委員会 1991 『弥栄平(6)遺跡・弥栄平(7)遺跡・弥栄平(8)遺跡』
 青森県埋蔵文化財報告書第138集
- 青森県教育委員会 1992 『唐貝地遺跡』青森県埋蔵文化財報告書第145集
 青森県教育委員会 1993 『富ノ沢(2)遺跡VI』青森県埋蔵文化財報告書第147集
 青森県教育委員会 2017 『青森県詳細分布調査報告書29』青森県埋蔵文化財報告書第587集
 青森県教育委員会 2019 『青森県内の貝塚遺跡群重点調査事業報告書』
 青森県埋蔵文化財報告書第606集
- 東北町教育委員会 1995 『沼添左ノ平遺跡』東北町埋蔵文化財報告書第4集
 東北町教育委員会 1996 『沼添左ノ平遺跡』東北町埋蔵文化財報告書第5集
 東北町教育委員会 1999 『ガス平(6)遺跡・ガス平(15)遺跡・ガス平(16)遺跡・ガス平(17)遺跡』
 東北町埋蔵文化財報告書第10集
- 東北町教育委員会 2004 『野田頭山(5)遺跡』東北町埋蔵文化財報告書第14集
 六ヶ所村教育委員会 1993 『睦栄(4)、(6)遺跡発掘調査報告』六ヶ所村埋蔵文化財報告書第1集
 業天唯正 2018 「貯蔵穴」『三内丸山遺跡44(第二分冊)』青森県埋蔵文化財報告書第588集
 杉野森淳子 2017 「貯蔵穴」『青森県史 資料編 考古1 旧石器 縄文草創期～中期』青森県
 塚本師也 2007 「乾燥型貯蔵穴」『なりわい ー食料生産の技術ー』縄文時代の考古学5 同成社
 二本柳正一・角鹿扇三・佐藤達夫 1959 「青森県上北郡唐貝地貝塚」『日本考古学年報』8
 福田友之 2012 『青森県の貝塚 ー骨角器と動物食料ー』北方新社
 松本建速 2019 「金堀沢遺跡」『令和元年度青森県埋蔵文化財発掘調査報告会 資料集』
 青森県埋蔵文化財調査センター



遺跡遠景 調査区西端 (No. 46 杭・I I-43 付近) 西から



調査前風景 I I-58 付近 西から



調査前風景 I I-67 付近 西から



調査前風景 調査区東端 (I I-108 付近) 東から



調査前風景 I I-87 付近 東から

写真1 遺跡遠景・調査前風景



断面 南から



確認 南から



完掘 南から

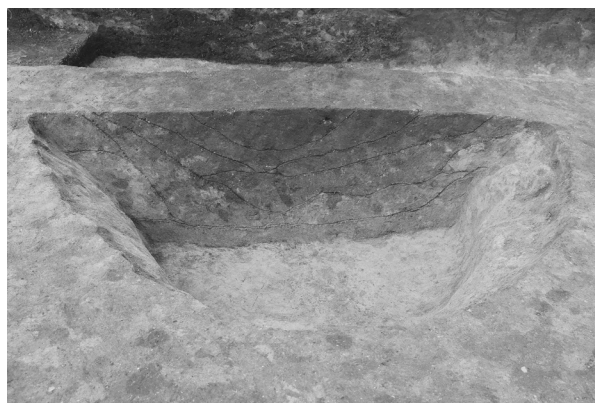
写真2 第1号土坑 (SK01)



完掘 南東から

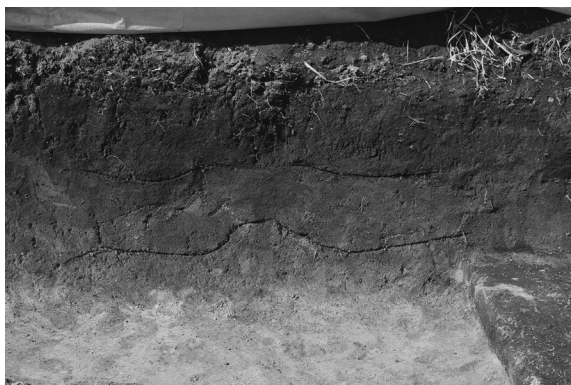


確認 東から



断面 南から

写真3 第2号土坑 (SK02)



基本層序1 南から



基本層序2 東から



作業風景 I I-103 付近 表土除去 西から



作業風景 I I-107 付近 表土除去 東から



作業風景 I I-55 付近 遺構確認 東から



作業風景 SK02 精査 西から



精査終了状況 I I-48 付近 東から



精査終了状況 I I-57 付近 西から

写真4 基本層序・作業風景・精査終了状況（1）



精査終了状況 I I-78 付近 西から



精査終了状況 I I-85 付近 西から



精査終了状況 I I-98 付近 東から



精査終了状況 I I-106 付近 西から



精査終了状況 トレンチA 西から



精査終了状況 トレンチC 西から



精査終了状況 トレンチK 西から



精査終了状況 トレンチN 西から

写真5 精査終了状況 (2)

報告書抄録

ふりがな	いえのかみいせき							
書名	家ノ上遺跡							
副書名	県営庄内第5地区外通作条件整備事業に伴う遺跡発掘調査報告							
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第609集							
編著者名	齋藤 岳 齋藤 正 木村 恵理							
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒038-0042 青森県青森市大字新城字天田内 152-15 TEL 017-788-5701							
発行機関	青森県教育委員会							
発行年月日	2020年3月11日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系 (JGD2011)		調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
いえのかみいせき 家ノ上遺跡	あおもりけんかみきたくんろっかしまむら 青森県上北郡六ヶ所村 おおあざくらうちあざいえのかみちない 大字倉内字家ノ上地内	024112	411149	40° 51' 02"	141° 16' 50"	20180626) 20180831	1,600	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
家ノ上遺跡	その他	縄文時代	土坑	2			・縄文時代の土坑2基を検出した。	
要約	<p>家ノ上遺跡は、太平洋から約13km内陸に入った海岸段丘上に位置する。南東に約3kmで小川原湖、4km東は小川原湖と内沼の境界付近となる。</p> <p>調査区は海岸段丘の尾根状の平坦部であり、標高は約75mである。農道整備予定地で東西260m、幅6mの範囲を調査した。土坑2基を調査し、遺物は出土しなかった。</p>							

青森県埋蔵文化財調査報告書 第609集

家ノ上遺跡

— 県営庄内第5地区通作条件整備事業に伴う遺跡発掘調査報告 —

発行年月日 2020年(令和2年)3月11日

発行 青森県教育委員会

編集 青森県埋蔵文化財調査センター

〒038-0042 青森県青森市大字新城字天田内152-15

TEL 017-788-5701 FAX 017-788-5702

印刷 株式会社 誠 工 社

〒030-0113 青森県青森市第二問屋町三丁目3-18

TEL 017-729-1611 FAX 017-729-1188

この印刷物は300部作成し、印刷経費は1部当たり1,276円(うち県負担638円)です。